

捨て犬保護施設 サンプル

「郁、お散歩に行こう」

「わうっ！」

大好きなご主人様との散歩。ここに来たばかりの頃は毎日連れて行ってもらっていたけれど、それはいつしか二日に一度になり、三日に一度になり……今は、最後に行ったのがいつだったか覚えていない。でもご主人様は「シゴトが忙しい」と、帰ってくることをすらほとんどできなくなってしまったから。大好きなご主人様に会えないのは寂しいけれど、元気でいてほしいから。無理して帰ってきて、倒れてしまったら大変だから。それにお水はウォーターサーバーから出せるようにしてくれたし、餌は週に一度、持ってきてくれるから大丈夫……最初はお腹が空いてお水をたくさん飲んだけれど、お水の残りを見たご主人様が怖い顔をしたので、それからはあまり飲まないようにした。そうしていたらいつの間にかあまりお腹は空かなくなったから、もう大丈夫。

「今日はいつもと違う、自然がたくさんあるところに行くよ」

「わうっ！」

忙しいのは仕方のないことなのに、ご主人様は「あまりかまってやれなくてごめんな」とたくさん言っていた。だからきつと、今日は今までの分も遊んでもらえるのだろう。初めてのところに行くのは少し緊張するけれど、ご主人様と一緒にだから楽しみ。

「周りに人家がないから、何も気にせずたくさん遊べるよ」

「わうううっ！」

嬉しい。それにたくさん遊べるってことは、きっとfrisbeeもボールもしてもらえるし、それが上手にできたら久しぶりに頭を撫でてもらえるかもしれない。

マンションを出てから車で三時間。走っているのは見たこともないような山の中だった。

「すごいだろ。自然がいっぱいだ」

「わう………！」

前にご主人様が「老後はこういうところで静かに過ごしたいな」と言っていたところみたい——もしかして、このままずっとここに住めるのだろうか。ずっと忙しかったのは、ここに引っ越してくるための準備だったのかもしれない。

「さあ、着いたよ」

「わうっ！」

大きなビニール袋から出されると、肌寒さに身体がぶると震えた。けれど遊び始めればすぐに暑くなるし、なにより手のひらと膝に触れる乾燥した葉っぱの感触が新鮮だった。

「ああ、土とはちよつと違うから気になるかな」

「わううう」

なんだか楽しくて、四つん這いのまま少し歩いてみる。カサツカサツパリッとした音がまるで音楽みたい。

(楽しい！)

たまにチクチクするけれど、パリパリした音は心地いい。少し速めに歩いてみると、膝に引つかかったたたくさんの葉っぱがガサツガサツと大きな音を立てた。

「わううっ！」

「よかった。気に入ったみたいだね」

お散歩と言っていたのに、なぜかご主人様は首輪とリードをつけなかった。きっと、人家がないからだろう。でも元々、ご主人様の元から逃げたりなんてしない。離れるのは投げられた玩具を取りに行くときだけで、他の時間はいつでもご主人様の足元にいる。

「今日はボールで遊ぼう」

「わうっ！」

それは郁の一番のお気に入りだった。ご主人様の家にもらわれてきて、初めてもらったプレゼント。

「さあ、もう少し奥に行こうか」

車を置いて、山の中に入って行くご主人様を追う。周りにはたくさんの木があって、急がないと見失ってしまいそうだ。けれど、ご主人様は何度も振り返り、郁の存在を確認しながら進んでくれた。

「ほら、もう少し……ここだよ」

「……わうううっ！」

そこは、山の中の開けた場所だった。ばかりとまるで郁のための遊び場を作ったかのように、広くまあるく空いていた。

「ほら、郁、投げるよ。取っておいで」

「わうううっ！」

アンダーローで投げられたボール。口で啣え、ご主人様の元に運んでいく。

「よし、いい子だ」

嬉しそうな顔。でも嬉しいのはむしろ、遊んでもらって、しかも褒めて頭まで撫でてもらえる郁なのに。

「もう一度、それ！」

「わうっ！」

さっきよりも速く、と思うけれど、外に出たのすら一か月ぶりで、しかもそのときは夜中にいつもの公園を一周ぐると回っただけだった。明らかな運動不足。けれど、どうしてもご主人様に褒めてもらいたくて。

「わうう！」

もう息が上がっている。身体もだるい。それでも、ご主人様に遊んでもらえるのが嬉しい。だって、こんなに一緒に過ごしてもらうのは一体いつぶりだろうか。ご主人様が郁を見られる。郁の名前を呼んでくれる。郁のためにボールを投げてくれる。褒めてくれる。頭を撫でてくれる。嬉しくて嬉しくて、何度も何度もボールを運んだ。

「いい子だ。よし、郁。じゃあ今度は思い切り投げるよ。取って来られるかな」

「わう！」

もちろん！ と前足を上げ、膝立ちになって答える。

「よし、行け！」

オーバースローで投げられたボールははるか遠く——急いで追いかけたけれど、木々の中にまで飛んだボールはすぐに見えなくなってしまった。

（ああっ！）

急がないと。ボールが消えたところから目を離さず、思い切りそこに向かって駆けた。地面を見なかったせいで何度か尖った石を踏んだ。痛かったけれど、大切なボール。ご主人様も、郁がボールを持つてくるのを待っていてくれてる。

（急げっ、急げっ！）

必死に駆けた。そして、ボールを見失った辺り。

（どこっ！）

きよろきよろと辺りを見回す。けれど、ボールはなかなか見つからない。

（ないっ！ どこっ！）

木の枝に引っ掛かってしまったのだろうか。でも、葉っぱを掠めながら落ちていく音を聞いたような気がした。

(どこっ！)

体重を支え続けた手首が痛い。でもそんなことは気にならない。早くボールを見つけてご主人様のところに届けなければ。

(ん？ ……あった！)

ボールは地面に落ちていた。すぐさま啜え、ご主人様の元へ急ぐ。

(あった、あった！)

遠くに投げられてもちゃんと取ってくる事ができた。匂いで見つけられるほどの嗅覚はないけれど、ちゃんと見つける事ができた。きっとご主人様は今までにないくらいたくさん褒めてくれるだろう——にやける顔をこらえもせず、ご主人様の待つ場所へ……けれど、そこには誰もいなかった。

(あれ？)

きよろきよろと辺りを見回してみるけれど、いない。方向を間違えたのだろうかと思ったけれど、こんな風に広く空いた場所などそうないだろう。

(飲み物かな……)

ここにはボールしか持って来なかった。だからもしかしたら郁がボールを取りに行っている間に、と車に飲み物を取りに戻ったのかもしれない。

(待っていてよう……)

さっきまでご主人様がいた場所は、微かに黒い土が見えていた。郁が、褒められて嬉しくなってお腹を上にしてごろごろしていたからだ。だから、やはりここで間違いない。

——けれど、いくら待ってもご主人様が戻ってくることはなかった。

(寒い……)

辺りはもう真っ暗だった。でもまだ、ご主人様は戻って来ない。枯葉を膝と顔でかき集め、山を作ってそこに潜る。けれどどうしても身体の方が大きくて、上手く潜ることができない。

(寒い……)

ぶるつとまた身体が震えた。でもその瞬間だけは少しだけ身体が温かくなる。

(ご主人様……)

どうしたのだろう。もしかして、車に戻ったらこの場所が分からなくなってしまったのだろうか。今頃郁を必死に探しているかもしれない。郁を迷子にしまったと不安に思っているかもしれない。

ご主人様のところに行きたい。でも、郁もここがどこだか分からない。ここに来るまで、ご主人様に会えた喜びでいっぱい、どこをどのように歩いたか全く覚えていないのだ。それに前にご主人様は言っていた。迷子になったときは決して動いてはいけないと。だからただ、お迎えを待つのだ。ご主人様は絶対に、必ず見つけてくれるから――。

(……ご主人様……)

もしかしたら、枯葉の中にいたせいで見落とされてしまったのかもしれない。いつの間にか眠っていて、呼び掛けに気付かなかったのかもしれない。

空には星が輝いていた。こんなにたくさん星を見るのは初めてで、ご主人様と一緒に見たかったなあと思う。でも今から迎えに来てもらえれば、一緒に見ることが出来る。きっとご主人様は憔悴していて、郁に何度も謝るだろう。寒かったねと抱きしめてくれるだろう。でも大丈夫だよと頬を舐め、お星さまがきれいだよと伝えたい。それで抱っこで一緒に星空を眺めたい。

(ご主人様……まだかな……)

眠ってしまったように気を付けた。だって、眠ってしまったらご主人様に失礼だから。必死に探してたのに寝ていたのか、なんて思われてしまうのは嫌だから。必死に目を開け、ボールを胸に抱く。さすがにもう、寒くて仰向けではいられなかった。枯葉の中で、身を丸めてご主人様の「郁」と呼ぶ声が聞こえてこないか耳を澄ます。

(……一か月後……くらいには……いや、一週間……三日後……)

三日位経てば、きつとこのことは笑い話になるだろう。「あのときは焦ったよ」なんて言いながらご主人様はきまりが悪そうに頭を掻き、お詫びと言ってお気に入りのクラッカーをくれるのだ。

(そしたら……ご主人様と半分こがいいな……)

半分こ——懐かしい。初めてご主人様の家に来たときにもらったクラッカー。嬉しくて美味しく、こんなに美味しいものを食べたのは初めてだと感動して、ご主人様にも半分あげたのだ。ご主人様は遠慮して「郁のだから」と言っただけ、どうしても味を知ってほしくて。口に啜えて押し付けると、「分かったよ」と笑いながら食べて「美味しいな」と言ってくれた。それからはずっと、おやつはいつでもクラッカー。たまに他のメーカーのものであったことあつたけれど、やはり一番好きなのは初めてもらったあのクラッカーだ。

(お腹空いたなあ……)

マンションでは水が飲めたけれどそれもない。喉も渴いたしお腹も空いてきた。特に今日はたくさん走ったから。でも、きつともうすぐご主人様が迎えに来てくれるから――。

「あっ！ いたっ！ 見つけた！」

「どこだ……！」

声が聞こえた。どうやらいつの間にか眠ってしまったらしい。顔を上げると、光が動いているのが見えた。よく見ると二人の男の人のようだ。背の高い人と、全体的に小さい人。こちらに向かって走ってくる。二人ともまだ若い。ご主人様ではない。

「良かった、生きてる！」

「ああ、すぐに運ぼう！」

「がうううう！」

知らない人。知らない人には警戒しないといけない。

「大丈夫、怖くないよ」

「がううううう！」

「仕方ないよ。分からないんだ」

「でも……あ、寒いよね」

小さい方が、背中に毛布を掛けてくれた。温かい。でも、知らない人には気を付けないといけない。ご主人様はよく「郁は可愛いから、悪い人に誘拐されないように気を付けるんだよ」と言っていたから。

「がううううう！」

「……話せない？ 言葉、分かる？」

「がううううう！」

低く唸ると、小さい方が助けを求めるように大きい方を見た。しかし、大きい方は首を振った。

「とにかくもう時間が経ち過ぎてる。急ごう」

「うん……ごめんね」

「がううううう……う……う……う……？」

四本の腕が同時に伸びて来て、逃げられなかった。どう逃げよう、と考えたせいで出遅れたのだ。気付いたら身体から力が抜け、脛が重くなっていた。

「……ごめんな、もう大丈夫だから」

その声は多分、大きい方だった。

目が覚めると、知らない場所にいた。温かくて、いい匂いがする。

~~~~~

「大丈夫かな……」

隣を歩く楓馬を見ても、返事は何も返ってこない。きっと楓馬も郁のことを考えているのだろう。

あの子は、今までに保護された他の子とは違った。「犬のフリ」ではなく、自分を本当の犬と思っっているように見えたのだ。そして、あの臭い。恐らくずっとお風呂に入っていないのだろう。かなりきつい臭いがしていたし、身体もガリガリで肋骨が浮いていた。身長は恐らく百五十センチもないだろう。明らかな虐待の跡——でも、本人は自分が捨てられたなんて想像もしていない。

「……飼い主、見つかった？」

「ああ」

きちんと尋ねれば、今度は返ってきた。きっと楓馬も憤っているのだ。

——そして、今でも睦実に気を遣っている。

「連絡は？」

「取れた」

低い声。きつといい話ではなかったということだろう。そうでなければさっきの子にそう言ったはずだ。

「結婚するからいらないって」

「そんな……!」

捨てられたのは疑いようがなかった。それでも不慮の事故とか、本当に遭難していたとか……何か、やむを得ない理由があつたのではないかと諦めきれずに思っただけけれど。

「Nシステムで追跡した。元々住んでいたのは二県離れた場所だ。戻って来ないようにと念を入れたんだろう」

楓馬も悔しそうだった。けれど、身勝手な飼い主はいなくなることがない。ここ「捨て犬保護施設」ではこのように年に数匹——数人、捨てられた子を保護している。今回幸いだったのは、捨てられた場所があつた山だったことだ。あの場所は犬捨て場として有名で、人が入り込めばここに連絡が来るようにしてあるのだ。

中には「もう飼えない」「もういらぬ」と言って伝手を頼ってここに連絡してくる人もいる。そういう飼い主はまだマシ……と思うのは確実に感覚が壊れている証だった。

「……しかも？」

楓馬が急に足を止めた。振り返り、俯きがちな顔を覗き込むようにして見上げる。

「……しかも？」

「あの子は——郁というらしいが、話せないそうさ」

「え……」

「生まれたときから犬として育ってる」

「え……？」

まさか。いや、確かに他の子とは全く違うと感じたけれど。

「学校にも行ったことがないそうさ。金に困った両親が赤ん坊のあの子を専門の業者に売り、そこで犬として育てられた。そこから買い取ったのが、捨てた飼い主だ」

最悪だった。もしそれが事実なら、あの子は二度も捨てられたことになる。そんなこと信じられなかった。信じたくなかった。楓馬の誠実なところに惹かれているのに、こんなときばかりは疑いたくなってしまふ。嘘を吐いてほしいと思ってしまう。

「多分、これまで経験したことないほど大変な子だ」

「……うん……」

それは……その通りだった。専門の業者が育てたということは徹底されている。感情の表し方から何から全て、身体が人間であること以外は犬の状態。犬をプレイしている人間とは全く違う。

「もしかしたら一生ここにいることになるかもしれない……よね」

それでもいいと思いつながら呟いた。けれど、楓馬は首を振る。

「それはダメだよ。他の子が不安がる」

「でもっ……」

確かにここにいるのはあの子だけではない。里親が見つかったり提携施設に送られたりして一時的に減ることはあるけれど、それでもまた、その分を埋めるように次の子がやってくる。だから誰もいなくなるということはない。本当は施設の必要性すらなくなった方がいいのだけれど、今のところその兆しは見えなかった。

「睦実、」

「……分かってる……」



分かっている。ここは捨てられた子を一時的に預かるところだから、あの子だけに愛情を注いでやることはできない。もしそれをすれば他の子が不安になってしまうから。場合によってはずっとここにいられると思わせてしまうことになるから。でも捨てられた全ての子を引き取り、平等に愛情を注ぎ、一緒に暮らしていくことはできない。ここでできるのは捨てられたことを自覚させ、次の飼い主を見つけ、心の傷を癒してやりながら新しい生活に目を向けさせることだけだ。その方が、その子にとっても幸せだから。でも郁については——あんな状態の子を誰かに引き渡すなんて考えられなかった。

~~~~~

「……睦実、おいで」

「え？」

腕を引かれた。でも強引きはない。連れて行かれた先は理事長室。普段、ほとんど過ごすことのない楓馬の部屋。

「少し……つらくなってしまったかな」

「あ……」

ドアが閉まると、この部屋は全くの無音になる。他の部屋では調理スタッフや事務員がバタバタと動いているはずなのに、聞こえるのは楓馬の声だけ。

「少し、ケアしよう」

「や、いえ、大丈夫……」

大丈夫だ。だって、今の睦実には楓馬がいるから。

「ダメだよ。顔色も悪い」

「……ごしゅ……」

つい、ご主人様と呼びそうになった。でも別に、呼んでもいいのだ。不安になったとき……つい犬に戻ってしまいそうになったとき、戻りたいとき……いつでもそう呼んでいいと言ってくれている。そして呼べば、甘やかしてもらえる。

「むう。お座りを試してみようか。久しぶりだが覚えてるか」

「……わん」

楓馬の目を見ながら床に膝をつく。一度四つん這いになって、それから犬のように開いた膝の間に腕を入れ、お尻を下げる。

「いい子だ。お手」

「わん」

睦実が楓馬に拾われたのは三年前。まさに昨日郁が捨てられたあの場所に、同じように捨てられた。当然今の郁と同じように、そのときは捨てられたなんて微塵も思っていなかったし、今でもたまに、いつか迎えに来てくれるのではないかと思っている。

「よし。上手にできたな。じゃあ、おかわりは？」

「う……」

おかわりもちゃんと覚えている。けれど、甘えたくて差し出された手に鼻を擦りつける。

「くすぐりたいよ。ほらむう、おかわりはこうするんだ」

左手首を持たれ、手のひらの上にのせられた。以前は——前の飼い主たちにはこうして甘えようとすれば殴られた。でも、楓馬はいつでも甘やかしてくれる。

「よし。覚えたかな。もう一度してごらん。おかわり」

「わう」

今度はきちんと左手首をのせた。これだけで、楓馬の笑顔をたくさん見ることが出来る。

「上手だ。賢いな。とてもいい子だ」

わしゃわしゃと頬骨の辺りを両手で挟まれ、擦るようにして撫でられる。それから頭、背中……と撫でられたらころんと仰向けになってお腹を曝す。といっても、今は服を着ているけれど。

「いい子だ——可愛いよむう」

胸やお腹を撫でてもらいながら、ごろごろと身体を揺らす。人間でいると言葉の選び方一つで喧嘩になってしまうこともあるけれど、犬はこうして簡単に愛情を示すことができる。

ご主人様が優しい人ならば、とても幸せな世界——そう考えられるのは、睦実が「自分が人間だと自覚のあるタイプ」だからだ。

ここで保護される子はおおまかに分けて次の三つ。

まず、プレイとして犬を演じているタイプ。これは単に、ただのプレイだ。でもそれが行き過ぎると、捨てられたときにどう生活していけばいいか分からなくなってしまふ。それでもここで少し人間に戻すような生活をしていけば、それなりに自立し、巣立っていく。もしくは提携している「幸せの家」に送ってそちらでのケアを頼む。

次に、自分を人間だと自覚しながらも犬としての生活を夢みているタイプ。睦実はどちらかというところらのタイプだ。犬であることは素であって、プレイという感覚はない。でも自分が人間であることを理解はしているので、人間としても生活ができる。ただ、心から休まるのは犬として生活をしているときだ。

そして最後が、郁のように自分を犬だと認識しているタイプ。このタイプはほとんどいない。当然、普通に育てられていれば少なくとも幼少期は人間として生活をしているからだ。だからこのタイプに当てはまるのは過去を忘れるほど洗脳されてきた人か、もしくは郁のように最初から犬として育てられた人か。どちらにしても、数はほとんどいない。この趣向を持つ人間にとつてはかなりの価値があるし、買うときも相当なお金を積む必要があるからだ。だから簡単に手放すことはない——はずなのに。

「……むう」

「あ……」

「……睦実。ケアはおしまいだよ」

~~~~~

翌朝、書類の整理をしていると楓馬が言った。

「睦実、今日梅沢さんが来るよ」

「え？」

梅沢と聞こえたけれど、心当たりのある梅沢は確か一年ほど前から海外に行っていたはずだ。しばらく海外にいるけれど、いい子がいれば遠慮なく連絡をしてほしいと言っていた記憶はある……けれど、まさかその梅沢だろうか。

「郁を保護したときに連絡してあったんだ。仕事の都合をつけるのに時間が掛かったけど、ようやく帰国できるって」

ということとは、やはり睦実の脳内に浮かんでいる梅沢と同一人物だ。とても優しい人で、メガネの似合う穏やかな人。年は確か四十歳だったか。

「もしかして郁くんのために？」

「そうだよ。写真と一緒に状況は伝えてある」

「そう……」

どうなるだろう。もし、会って……郁が梅沢を気に入っても、梅沢が郁を気に入らなければ郁はまた捨てられたような気持ちになる。それは避けたい。きっと同じように思ったからこそ、楓馬も前もって写真を送ったのだろうけれど——。

「お風呂、入れておかない？」

また臭いで嫌われてしまうのではと思うと怖かった。本当はとても可愛いのに。でも、どうしてもまだ郁の警戒心が強すぎて檻から出すことができていなくて。でも、せっかく梅沢が見に来てくれるのなら少しでもいい状態で迎えたい。

「いや、このままでいいよ。臭いで嫌だと言うくらいなら預けることはできない」  
「……うん……」

でも、恋人でもペットでも、外見は大事な要素だ。生まれたときから一緒にいる家族でも外見で否定されてしまうことがあるくらいなのに。確かに梅沢はそんなことは気にしないようにも思えた。それにわざわざ海外から戻ってくるのだし、お風呂に入れていないことは伸び放題でベタついた髪が写った写真からも読み取れることはできるだろう。

「電話で話した？」

「全部伝えたよ。それでも会いたいって。一目惚れだって言ってた」

「顔が見える写真があったの？」

写真を堂々と撮ることはほとんどない。特に警戒心の強い子はそれだけで怯えたり威嚇したりするので、部屋についてカメラの映像から写真を作るのだ。けれど郁はずっと丸まっているのでなかなか写真にするタイミングはなかっただろう。

「起きてるとき？」

「いや、なかったよ。映っているのはだいたい背中だった」

「だよね……」

カメラの向きを変えることもできるけれど、それだとご飯や水の減り具合を確認しにくくなってしまうのだ。本当は檻にも入れたくないし、カメラだつてつきたくない。極力みんなと一緒に過ごしたい——けれど、それぞれに様々な思いがあって、今はこうするしかなくて。

「でも、それでも一目惚れって言ったの？」

「そう。どこがツボだったのかは分からないけど、この子だつてピンときたつて」

「そう……」

その感覚が勘違いでなければいい。でも実際に会って顔を見たら……そのときのこととはどうなるか想像もつかない。それにどんなに梅沢がいいと言っても、郁が受け入れなければ引き渡すことはできない。

「睦実、大丈夫だよ。郁は大丈夫。それから、タロウは幸せの家に引き取ってもらうことにした。あつちで丁寧にやってくれるから」

「うん、分かった」

タロウは性的虐待を受けてきた子だ。でも幸せの家にいれば必ず幸せになることができる。

「午後には迎えが来るよ」

「午後……梅沢さんは何時？」

タイミングがかぶらないといいなと思って尋ねると、楓馬は腕時計に視線を落とした。普段ならすぐに答えてくれるのに珍しい。

「八時に着陸と言っていたから……」

今の時間は十時半。まさか………と思っていると、門に設置されたインターフォンが鳴った。咄嗟に二人で目を合わせる。

「え、まさか……?」

「……恐らく」

別に急に來られて困るということはない。一般家庭のように部屋が散らかっていて、なんでも当然ない。むしろ今感じるの喜びと緊張だ。帰国してすぐにここに来てくれたことへの喜び。そして、梅沢と郁の相性がどうか、という緊張。

「行ってくる!」

「俺も行くよ」

事務職員が正門を開けると、梅沢はキャリーケースを転がしながらやってきた。

~~~~~

それから十日。頼みがあるという梅沢に言われて一緒に郁の部屋に入った。

「……ここ、開けてみてもいいかな」

「あ……は、はい」

元々檻に鍵はない。だからそのまま引けば檻の中に入ることができる。

「郁くん、お邪魔するよ」

声がいっつもより近いと感じたのか、梅沢が檻の中に入ろうと顔を入れたときだった。まるでずっと食べていないとは思えないほどの動きで、郁が梅沢にぶつかった。

「おっと」

きつと、逃げようとしたのだろう。いや、逃げるというより主人の元に帰ろうとしたのだ。

でも力ない身体は梅沢にぶつかっただけでよろけてしまった。それを梅沢が抱き留め、ぎゅつと抱きしめる。

「怪我はないかな。痛いところは?」

きつと、触れれば悪臭が鼻をついただろう。それでも息苦しうにすることもなく、梅沢は優しく郁に話し掛けた。

「うううう」

「怖くないよ」

「ぐるううううう」

唸っていた。久しぶりに聞いた郁の声。でもやはり、ここに来たときほどの力強さはない。

「ああ……驚いたね、怖かったね」

そう言って梅沢が郁の頬を撫でたときだった。郁の顔が梅沢の手を振り払うかのようにサツと横に動いた瞬間、噛んでいた。思い切り、梅沢の指を。

「っ！ 郁く——」

郁くん！ と叱ろうとしたときだった。梅沢がぱっと首を振ったのだ。そしてすぐに視線を郁に落とし、優しい声を出す。

「怖い思いをさせてすまなかった。怖かったね……」

郁はそれでも口を離さなかった。思い切り、食いちぎろうとしているように見える。

「や、もう！」

それ以上はダメだ、そう思うのに、また梅沢は首を振った。

「いいよ。いいんだ。郁くん、大丈夫。郁くんの痛みを分けてごらん」

梅沢の指から血がぼたりと落ちた。ダメだ、もう——怪我をさせてしまった。やはりまだ早すぎた。急いで楓馬を呼ぼうと壁に設置された受話器に手を伸ばしたときだった。

「ああ、大丈夫かい」

梅沢の空気が緩んだ気がして振り向くと、血の流れる指が解放されていた。

「頑張ったね。いい子だ」

主人なら噛まないように躡けるはずなのに、梅沢はなぜか郁を褒めた。抵抗を止め、力を抜いた郁の身体を抱き寄せ撫でながら。

「きつと、知らない人には気を付けるように躡けられていたんだろうね。郁くんはとても可愛いから、誘拐なんてされないように。ちゃんと言うことを覚えていたんだね、偉かったね」

~~~~~

「さあ、むう。いや、それとも睦実のままがいいかな」

「あ……わう……」

パジャマを脱がしてもらい、犬としての自然な姿に戻る。相手は楓馬なので、すぐに仰向けになって服従のポーズを取る。

「可愛いよ」

楓馬は勃起していない。ペニスに強引に触れるようなことはしない。まずはいつものようにお腹や胸を撫でてくれる。

「いい子だ……お腹が気持ちいいな」

「わふっ……」

耳の裏も撫でてもらった。それから脇、胸、もう一度お腹。性的な触れ方は一切ない。強引に感じさせようとしてくることもない。でも、意識とは裏腹に身体は射精を求めている。だから、勝手に勃起してしまう。

「うん、勃起してきた。やはり溜まっていたね」

「わうっ」

溜まっていなければ、同じようにされても勃起はしない。触り方も、睦実を見る楓馬の視線も同じなのに——やはり、身体が勝手に反応しているのだと思う。

「もう少し遊ぼうか」

「わうっ」

起ったからと言ってすぐに射精させようとしなくていいところが好き。身体だけでなく、気持ちも高まるのを待ってくれるのだ。

「最近おやつをあげていなかったね」

一通り身体を撫でると、楓馬はベッドから降りた。そして簡易キッチンの棚から小さな箱を取り出し、中身を一つ手のひらに出して戻ってくる。

「ほら、むう」

「わう」

ベッドの上で食べてはいけない——だから、きちんとベッドから降りて楓馬の前にお座りをして。

「うん、よし。食べていいよ」

口元に寄せられた手のひら。そこに口をつけて直接食べる。

（おいし……）

差し出されたおやつは人間用のジャーキーだ。良く噛んで、喉に詰まらないように気を付けなければ。

「美味しい？」

返事はしない。ただじっと楓馬の目を見ながら咀嚼する。そうすると、目を細めてくれるから。

「可愛い。おやつ美味しいね。ペニスを勃起させながらもおやつを食べる姿は本当に可愛い」

人間だったら恥ずかしい内容。でも、今は全く気にならない。むしろ犬らしいと褒められているのだと嬉しくなる。

「食べ終わったかな」

もつと、と言うようにジャーキーの匂いの残る手に鼻をこすりつける。

「ダメだよ。今日はもうおしまい」

それでも、「もつと」と鼻を押し付ける。それから、名残惜しい気持ちを表すために手のひらを舐める。

「くすぐりたいよ」

そう言いながらも、楓馬は睦実を振り払ったりはしない。睦実が「おしまい」を理解できるまで、受け入れられるまで好きにさせてくれる。

「……わふ」

「よし、じゃあもう一度身体を撫でようか。ベッドにおいで」

ぼんぼんと叩かれたのはベッドの真ん中だった。だからそこにもう一度転がりお腹を見せる。

「わうっ」

「一つで我慢できて偉かったね」

「わふっ」

ご主人様の自慢のペットでありたい。だからもつと褒められるようない子になりたい。

「怪我也……していないね。次に散歩に行けるのは春になるが……我慢できるかな」

「わふ」

散歩に行けなかったのは、単に睦実の我儘のせいだ。どうしても郁と離れたくなくて、傍にいたくて、それで、行きたくないと言ったのだ。

「よし。じゃあ暖かくなったらたくさん行こう」

撫でられる心地よさに身体を揺らしていると、楓馬がベッドから降りてクローゼットに向かった。いよいよだ、と少しだけ緊張が走る。

「むう、少し場所を空けてくれ」

「わう」

ベッドから降り、楓馬が抱えてきた大きな犬——の人形がベッドの真ん中に置かれるのを



待つ。これはただの人形ではない。どっしりと重く、そして陰部には穴が開いているのだ。

「今日は……これだよ」

見せられたのは小さな透明のオナホール。サイズそのものは小さいけれど、所有している中で一番挿入口の大きなものだった。睦実のペニスには少し大きくて、射精までに時間が掛かるもの。気持ちいいことには変わりないけれど——焦らしプレイなら楓馬とのセックスのときがいい。だって、オス犬としての交尾はいくまでの時間が長いと疲れてしまう。

けれど、犬ではそれを伝えることができない。当然楓馬もそんな気持ちに気付くことはなく、オナホールは犬の人形にセットされてしまった。これで、もういつでも交尾を始めることができる。

「ペニスを見せてごらん。傷がないか確認するよ」

「わう」

メス犬の横に寝転びお腹を見せる。安心させるようにお腹を撫でられ、それからペニスをつまむように持たれる。

「——うん、大丈夫そうだね。よし、交尾していいよ」

「わう」

人形に後ろから覆い被さるようになって乗り上げ、腰を振って挿入を試みる。けれど、手を使わない挿入は難しい。

「ううううっ」

「まだ難しいね」

背後で見守っていた楓馬が陰囊を脇によけた。そしてペニスと挿入口を確認し、手で中に導いてくれる。

「ほら、動いてごらん」

緩いオナホールのはずなのに、久しぶりだったせいか驚くほど気持ち良かった。少し腰を振るだけですぐにいきそうになってしまう。

「ハッハッ——」

セックスでは女性のような嬌声をあげてしまうけれど、交尾のときにはそれが無い。意識しているわけではないので、きつともう本能的なものなのだろう。

「ハッハッハッ——」

気持ちいい。もういきそうだった。早くいきたい。イって、交尾ができたことを褒めてほしい。

「ハッハッハッ——ッ！」

スピードを速めたからか、ペニスが穴からずると抜けた。もうイク直前だったのに——  
急いで腰を揺らすけれど、上手く入れることができなくて、焦る。

「わうううっ！」

「ああ、抜けてしまったか」

また背後から——足の間から、ペニスを持って挿入口に導いてもらう。けれど、もう本当にギリギリだった。あと一回か二回擦ればイける……というところだったせいで、挿入まで我慢できず、勝手にペニスから精液が弾けた。

ハピエンです。

郁と睦実の主人公。

約5万2千文字。

今後、書き下ろし込みの製本版を出す予定です。  
宜しくお願いいたします！

捨て犬保護施設 サンプル

goneone